

地球ことば村

あれも日本語、これも日本語: 日本語諸変種の紹介

黒木 邦彦 (神戸松蔭大学)

第1回 日本語話者同士を繋ぐ共通語

筆者の研究対象は日本語です。地球ことば村を訪れる人には、(最も)馴染みの有る言語でしょう。日本に居れば、空気に等しいので、地球ことば村にて語るには歯応えに欠けるやもしれません。

さて、みなさんが想像する日本語とはどのような言語でしょうか。現代日本の公共空間や各種メディアで使う日本語を思い浮かべますかね? 「共通語」と呼ばれるそれも勿論日本語なのですが、日本語と呼びうるものは他にも有ります。このことを学ぶため、次の3名が日本語でやりとりする状況を考えてみましょう。

(1) 様々な日本語話者

吉幾三^{よしいくそう} (1952 年–現在): 津軽地方の嘉瀬村^{かきせむら} (後ちに市町村合併で金木町^{かなぎまち}、五所川原市^{ごしょがわら}) に生まれ育つ。中学卒業後に上京し、全国区のシンガーソングライターに。この
動画から分かれるとおり、共通語も津軽方言も話す。

本居宣長^{もとおりのりなが} (1730–1801): (現在は牛肉で名高い)伊勢国松坂^{まつさか} に生まれ育つ。町医者を務める傍ら、日本文化や日本語を研究。古典解説の『古事記伝』『古今集遠鏡』、言語研究書の『てにをは紐鏡』^{ひちかがみ}、『御国詞活用抄』^{おくにことばかつようしやう}、随筆の『玉勝間』^{たまがつま}¹ など、著作多数。あまりの研究量から、「本当に働いていたのか」と疑われたり、「ちゃんと寝ていたのか」と案じられたりしている。仕事柄、当時の(医者や学者が話すような)松坂方言を日常的に使っていたはず。

清少納言 (966 頃–1025 頃): 出身地未詳。日本語母語話者ではあろうが、どのような日本語を話していたかは分からない。『枕草子』を著しているとおり、平安文学の

¹ 『玉勝間』の草稿には宣長が「玉賀都万」「玉がつま」と自筆しているようです (『玉勝間』って面白い本?)。この表記を踏まえると、『玉勝間』の読みは「たまかつま」より「たまがつま」の方が妥当です。「たまかつま」という読みは、「玉勝間」という漢字表記を素直に訓読みした結果なのでしょう。

日本語には堪能。

(1) の 3 名が各自の日本語で話して、会話が成り立つでしょうか？幾三さんは、残る 2 人に気を遣って、五所川原以外でも通じる共通語で話し掛けるやもしれません。しかし、ここに言う共通語は現代共通日本語です。遠い昔を生きた宣長さん、清少納言さんには通じません。[欧州や南米のサッカー選手たち](#)や、[21 世紀の渋谷に転生した諸葛亮](#)²が現代共通日本語をペラペラ話す漫画とは勝手が違うのです。

幾三さんら 3 名を繋ぐ日本語は、古典に用いられている日本語でしょう。国語の授業で読んだ『源氏物語』や『おくのほそ道』には、「[をかしの御髪^{みづし}や](#)」「[古人も多く旅に死せるあり](#)」のような日本語が出て来ますよね？あれを取り敢えず「古典語」と呼んでおきます。我々現代人には縁遠い日本語と成りつつありますが、踏切の注意喚起は「[とまれみよ](#)」、おみくじの託宣は「待ち人 来るも遅し」のように、現在もしばしば古典語で行ないますね。

幾三さんら 3 名には、古典語による著作物が有ります。まずは、幾三さんが作詞した「[岩木川](#)」を見てみましょう。「岩木川」の日本語は基本的に共通語ですが、(2: **太字部**) のとおり古典語もちろほら見えます。参考として、それぞれに対応する共通語を併記しておきました。下線部の違いを見比べてみてください。

(2) 吉幾三「岩木川」1997 年作詞

- a. 津軽を **流るる** 岩木川
流れる
- b. 花火が 映る 水辺に **重なりし** 遠い 初恋
重なった
- c. 白神の 枯れ葉 **乗せたる** その 水は
乗せている

宣長さん、清少納言さんの著作物は基本的に古典語で書かれています。(3-4: **太字部**) のとおり、幾三さんが「岩木川」に使っていた (2: **太字部**) と同一/類似の語も見えますね。

² 人間が使う自然言語は、こういう荒唐無稽な物事も簡単に表現できます (他の動物が使う言語はそうではないようです)。

(3) 本居宣長の著作物

- a. こよなく 確かに 得らるる こと 大きぞかし

得られる (古今集遠鏡、1797 年刊行: 例言)

- b. 江戸に 有りし 家の 生業をさへに 失ひたりし ほどにて

有った (玉勝間、巻 2、1795 年刊行: 103 段)

- c. そもそも 経書は かの 国の 道を 載せたる 書にて

載せている

(玉勝間、巻 4、1797 年刊行: 211 段)

(4) 清少納言『枕草子』1000 年頃成立

- a. 水の 流るる 音 笛の 声など 合ひたるは

流れる (第 142 段)

- b. 一日の 文に 有りし ことなど 語りたまふ。

有った (第 136 段)

- c. 肥えたる 人 痩せたる 人

痩せている (第 71 段)

(2-4) のとおり、幾三さんら 3 名には古典語の著作物が有ります。おのおのの古典語力はまちまち (古典を読みこなし、色々著してもいる宣長さんが最も堪能) ですが、彼らを繋ぐ日本語は古典語以外に有りません。 (続く)